



## 目次

教育研究基盤を厚くする	1
2022年度新任教員の紹介	2
文学部附属国際マンガ学教育研究センター	2
コロナ禍を越えてのGLC生の活動	2
文学部～この1年～	3～6
総合人間学科／歴史学科	
文学科／コミュニケーション情報学科	
2022年度の教務委員会について	7
2022年度の学生支援委員会の活動について	7
2022年度オープンキャンパス報告	7
留学体験記	7
インターンシップに参加して	7
漱石・八雲教育研究センター活動報告	8
永青文庫研究センター活動報告	8
2022年度熊本大学文学会活動報告	8

## 教育研究基盤を厚くする

文学部長 水元 豊文

分野として拠点化するため、「文学部附属国際マンガ学教育研究センター」を設置しました。これまでの国立大学にないセンター組織として、総合大学の特色を活かして、自然科学系とも連携を図り、文理融合研究を促進し、マンガ学を含む日本及び世界の現代文化資源学研究を牽引していくつもりです。



組織的な研究力の強化にも取り組んでいる文学部ですが、人文社会科学分野は長期にわたる地道で根気のいる個人的な調査と思考の積み上げが不可欠であり、自然科学や生命科学分野のように成果を大量に生産するのは容易ではありません。そのような中で、2名の方が令和4年に専門研究書を出版され、学内外で高い評価を受けられています。お一方が近世九州歌壇及び中世歌会資料の専門研究者である日高愛子准教授で、『飛鳥井家歌学の形成と展開』という500頁の大著をまとめられました。もう一方がポーランド語文学を専門とする井上曉子准教授で、長年にわたる研究を『語りの断層—ドイツ＝ポーランド国境地帯の文学』という学術書としてまとめられました。機会があれば、ぜひお読みいただけすると幸いです。

研究の更なる強化に取り組んでいる文学部では、本年度も、新たに2名の教員をお迎えしました。お一人が民俗学を専門とする及川高准教授で、既に『「宗教」と「無宗教」の近代南島史—国民国家・学知・民衆』という学術書を出されている、次代を担う若手研究者です。もう一方がイギリス演劇研究の富村憲貴准教授で、イギリス中世から初期近代演劇における音楽・身体言語表現についての研究で業績を積み上げるだけでなく、市民向けを含め、音楽活動にも積極的に取り組んでいる方です。

現在、コロナの影響もあり、生活に困窮する学生も増えております。文学部は今後とも有為な人材を世に送り出すため、教育研究に邁進してまいりますので、寄付を含め、ご支援とご協力をどうぞよろしくお願ひいたします。

### 教育プログラムの組織的拡充と個々の教育力の更なる強化

文学部では現在、高度な研究及び専門職人材の育成を目指し、学部と連動する形で、大学院社会文化科学教育部の博士前期課程に、これまでの学問分野に加えて、令和5年4月に現代文化資源学研究コースを、そして、令和6年4月には公認心理師養成コースを新設し、教育内容の更なる充実に取り組んでいるところです。

一つ目の大学院の現代文化資源学研究コースは、平成30年に文学部コミュニケーション情報学科に新設した現代文化資源学コースの学生だけでなく、国内外から幅広く学生を集め、デジタルアーカイブへの理解を含め、DXを活用し、現代文化についての高度な資料収集・分析能力を持ち、専門的かつ学際的な視点で現代文化資源学研究を行う研究人材の育成を目指しています。

二つ目の大学院の公認心理師養成コースは、令和2年度に文学部と教育学部の共同で新設した公認心理師養成の学部カリキュラムを大学院にまで拡充し、学部・大学院6年の一貫した専門的で高度な養成プログラムとして、熊本県内や九州域内でリーダー的な役割が組織で担える公認心理師の育成を目指すものです。

文学部では教育プログラムの組織的な拡充を学部として積極的に進めていますが、その基盤となるのは個々の教員の教育力であることは間違ひありません。ほぼ毎年、大学の教育活動表彰でも文学部の教員が選ばれているのですが、本年度はフランス語教育に関連するデジタル教材や教科書の開発に熱心に取り組み続けられているミシェル・サガズ教授が表彰を受けられました。文学部には他にも、それぞれの分野で意欲的に教育に取り組んでいる教員が数多くおりますので、公開講座等でぜひ触れていただけると有り難いです。

### 国際マンガ学教育研究センターの新設、そして、特筆に値する研究成果の書籍化

文学部では令和4年10月に、マンガ学関連研究成果の発信と文化庁マンガ刊本アーカイブ事業の推進を基盤とし、マンガやアニメ、ゲーム、音楽などを含む、日本の現代文化資源関連研究成果の国内外への積極的発信を目指し、大学の特色ある研究

所属(学科・コース／研究センター)

専門分野 氏名

総合人間学科

地域科学コース

民俗学

及川 高

文学科

多言語文化学コース

イギリス演劇

富村 憲貴

## 2022年度新任教員の紹介

### 及川 高

総合人間学科地域科学コース

2022年4月に着任いたしました。専門は日本民俗学で主に南西諸島(奄美・沖縄)をフィールドに、日本の中で「周縁」に位置づけられてきた地域において在来の民俗文化が辿った近代化のダイナミズムに関心を持ってきました。熊本に赴任する前は沖縄の大学に務めていたのですが、そこでの調査・研究と生活体験を通じて、南西諸島の民俗には、一見して日本「本土」とは異なりつつも、実は基層レベルでは多くの共通性が見出されることに気づかされました。この熊本の地に軸足を置きつつ、北は朝鮮半島から南は沖縄に至る地域の基層文化について、あらためて丁寧に考えてみたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。



### 富村 憲貴

文学科多言語文化学コース

2022年4月に着任いたしました富村憲貴と申します。文学科多言語文化学コースの教員として、イギリス文化・文学関連の科目を担当しております。また、イギリス演劇における音楽使用の通時的分析や、身体言語表現の研究に取り組んでいます。出身は熊本で、大学院修士・博士課程を熊本大学で過ごしました。母校の学生を育てる立場になり、時代に即した学びの機会を提供できるよう、日々楽しみながら努力しております。あわせて担当している教職関連科目では、知識の伝達とともに英語運用力を高められる授業を行い、言語学習の面白味を伝えられる学生を育てていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



## 文学部附属国際マンガ学教育研究センター

### 国際マンガ学教育研究センター兼務教員 日高 利泰

2022年10月1日付で新たにマンガの研究センターが設置されました。国立大学の文学部としてはめずらしい取り組みとして、県内各報道機関だけでなく全国紙からの取材もいくつかあり、関心の高さがうかがわれます。

同センターの目的としては、マンガに関する研究資源のアーカイブ・データベース構築、国際的な研究成果発信および人材育成、「マンガ県くまもと」プロジェクトへの参画を通じた地域貢献、といったものがあります。12月10日には「マンガ刊本アーカイブのめざすもの」と題してセンター開設記念シンポジウムを開催し、120名ほどの参加がありました。2023年4月には大学院社会文化科学教育部に現代文化資源学研究コースが新設されます。センターが学部・大学院の教育研究活動とうまく連動し

て相乗効果を發揮できるものと期待しています。

とは云うものの、年度の後半にようやく組織を立ち上げ、拠点(共用棟黒髪6の2階)が定まり看板が掲げられたという段階で、まだまだ体制が整っているとは云い難い状況です。次年度以降、少しずつ設備・人員を拡充してきちんとした成果をあげられるように頑張りたいです。



▲開設記念シンポジウム告知

## コロナ禍を越えてのGLC生の活動

### 文学部GLC教務専門委員 坂元 昌樹

文学部グローバルリーダーコース(GLC)は、学生受け入れを開始してから2022年で6年目を迎えることとなりました。2020年以来の新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けてGLC生の活動にもさまざまな制約が生じましたが、現在の文学部GLC生は、コロナ禍を乗り越えて様々な活動に活発に取り組んでいます。

コロナ禍の下で制限されていた海外への留学については、GLC各期の学生たちが英国のリーズ大学やダラム大学、アイルランドのサウスイースト工科大学などの各大学への留学へと旅立っています。その他の海外留学プログラムや海外研修に向けての準備を進めている文学部GLC生も多く、コロナ禍の下にあっても各自が深めてきたGLCにおける学びを存分に生かして、それぞれの目標に向けて着実に歩みを進めています。

この一年、4年生となった3期生は、卒業後の進路に向けての活動に各自が真摯に取り組んできました。3年生に進級した4期生や2年生となった5期生は、引き続きGLCでの研修やセミナー、フィールドワークを含めたプログラムへの精力的な参加を通して学びを深めています。2022年4月に入学した6期生10名は、大学で初めて経験するGLCの各種プログラムにフレッシュな姿勢で取り組んでいます。そして、2023年4月に7期生10名を迎える準備も順調に進んでいます。今後とも文学部GLC生の活躍にご期待ください。



▲天草でのGLC研修風景

## 総合人間学科

### 哲学



### 菅原 佳祐さん (3年)

哲学は、言葉や人間の心などの多様で複雑なテーマに対して、論理的思考を用いて向き合う学問です。私たちの研究室では、論理主義や認識論の研究を中心として、様々な哲学のテーマを研究しています。哲学演習では、英語やドイツ語で書かれた、フレーゲやネーベル等の哲学者の論文を、担当者を分けてながら翻訳して読み進めています。論文を読む際に挙げられた疑問点や論点について、学生同士や先生とで議論をすることもあり、これによって様々な人の意見を聞いてテキストの理解や自分の意見を深めることができます。外国語を日本語に翻訳しながら哲学書を読み解くのはとても難しいので、地道な学習を続けることがとても重要だと思います。演習の準備をする際は同じ研究室の仲間と予習をすることもあります。また、担当教員の大辻先生との卒論に向けた面談では、自分のテーマの論点を整理したり、文章に関するアドバイス、考えを深めるために質問や反論をいたたくなど、丁寧な指導が受けられます。私の場合は、「言葉を正確に理解して使うこと」が哲学をする上で必要不可欠であることを教わりました。哲学を学ぶことはとても大変ですが、様々な疑問に対して論理的思考を使って向き合い、意見を交換するという営みを続けることで、自分で考える力や、テキストの読解力等、様々なことに通用する力を鍛えることができると思います。

### 芸術学



### 前川 菜々香さん (4年)

私が研究しているのはTRPG（テーブルトーク・ロールプレイングゲーム）というジャンルのゲームです。一般的に知られているコンピュータゲームのRPGとは違い、サイコロの出目とプレイヤー、ゲームマスター（進行役）間の対話によって物語を進めています。私が注目しているのはTRPGの対話の要素で、TRPGには物語を進めるための対話だけでなく、物語を通して得た感情や関係性を改変シナリオやオリジナルシナリオを作ることで落とし込み、また新たな対話するゲームとして遊んでいく「作品による対話」があります。この「作品による対話」はTRPG文化そのものの発展にも繋がっている……そしてそれは今までのエンタテインメントとは少し違う新しい形だと言えると考えています。卒論では、クトゥルフ神話TRPGシナリオ「カタシロ」をめぐるムーブメントを通してTRPGにおける「作品による対話」について考察しています。私は自作のTRPGシナリオも頒布しているのですが、「カタシロ」やその流れで現れた作品に非常に影響を受けていることもあり、自分のシナリオについての分析や考察も入れていくつもりです。

卒業後は自分でも作品を発信する側になりたい、特にTRPGや小説を通して多くの人と繋がれる、対話できる作品をたくさん生み出していきたいと考えています。

### 心理学



### 重村 亮博さん (3年)

心理学と聞いて、皆さんは何を思い浮かべますか？ 心理テストや性格検査、あるいはカウンセラーなどの心理職を思い浮かべた方もいるでしょうか。心理学とは、「心や行動を科学的に理解しようとする学問」です。心理学履修モデルでは、認知心理学という、実験で得られたデータを基に分析を行い数値化することで、人の感覚や知覚のしくみを明らかにしようとする学問を学ぶ研究室に所属します。私たちは寺本先生と安村先生をはじめ、研究室の様々な方に、ご指導、お力添えしていただきながら、関連分野の論文を読んだり、研究を行ったりしています。

また、本履修モデルでは公認心理師資格取得のための講義もあり、認知心理学だけではなく、臨床心理学や教育心理学など、幅広い分野を学ぶことができます。これらの講義は教育学部と同時に開講されることもあるので、学部を跨いだ様々な講義を受けることができるのも特色の一つです。

心理学では、昨年度までZoomやオンラインデマンドなどの授業がメインでしたが、今年度から少しづつ対面授業も増えてきました。今年度になって初めて話したという人もたくさんいましたが、全員個性豊かで楽しい研究室です！

### 倫理学



### 中村 優吾さん (3年)

倫理学とは、人間の行動の規範となる物事の道徳的な評価(善と悪など)について考える学問です。倫理学履修モデルでは、規範倫理学・応用倫理学・メタ倫理学、そして深層心理学などを学ぶことができます。私が所属しているゼミでは、それぞれが興味のあるテーマについて本を読んで要約と意見を発表し、ディスカッションを行っています。安樂死、反出生主義、責任とは何かといった生命倫理・哲学的テーマから、美容整形の是非やスポーツにおける倫理、さらにはロボットの倫理まで、幅広いテーマが扱われます。各々が興味を持っている分野が多岐にわたるため、興味深い知見を得ることができます。また、自分の考えに対して全く異なる視点から意見をもらえることも刺激的で、とても充実した時間を過ごすことができています。

私は現在、ビーター・シンガーという倫理学者について興味を持っています。彼は、「貧困に苦しむ人々に対して、私たちは寄付する義務がある」と主張し、他者を援助する義務の重みを強める議論を展開します。論理的かつ実践的な主張には頗るざるを得ないところもありますが、本当にそういう義務はあるのか、あるなら限度はどこまでか、私たちの生活を犠牲にしてまでそうするべきなどを、ゼミでの対話から生まれる様々な観点も参考にして、今後も考えていくたいと思います。

### 社会学



### 中村 萌乃さん (3年)

私たちは常に誰かと関わりながら生きています。生まれて最初に所属する家族をはじめ、学校や職場などの集団の中で、はたまた飲食店や交通機関など公共の場の中でも相互作用は生まれます。その場において、私たちは様々な役割を与えられ、それに適した振る舞いを求められます。そこで人のとの関わりの中で生まれるあらゆる関係性に着目し、私たちは日常で「あたりまえ」だとと思っている事象を問い直していくのが社会学です。

ゼミでは主に社会学に関する文献を読み、概念装置を抽出し、それを使いこなす技術を身に付けています。問い合わせに対する答えを作る際には、社会学の専門的知識を持たない人でも理解出来る文章で書くことを心がけ、抽象的な概念を運用する能力を養っています。自分の解釈を学年関係なく共有し意見交換を行うので、新たな発見を得て考えを深めることができます。また、3年生の段階で卒論のテーマを先生と一緒に考えるので、時間をかけて研究することが出来ます。

ゼミは和やかで、自分の意見が言いやすい雰囲気があります。これは先生がどんな意見も否定することなく、それを踏まえた上で自然と答えるにたりり着けるようなヒントを下さるからです。私は先生からのアドバイスを参考に、アイドルのファン集団を対象とした卒論のテーマを設定することが出来ました。

社会学が持つ「あたりまえを疑い、物事を捉える視座」と、ゼミで培われた「自分で考える力」は、卒業後もさまざまな場面で活かされると思います。

### 文化人類学



### 柳瀬 達也さん (4年)

文化人類学とは異文化に目を向けてその異文化について知ると同時に、私たちの文化と比較していく中で、私たちの文化やひいては人間そのものについて考えを深めていく学問です。また異文化を知るための手法として、その中へ身を投じてみるフィールドワークを行なうことが特徴のひとつです。そうした実践を通して、私たちの「当たり前」という色眼鏡の存在に気づき、思考の枠を広げていくことができるという風に感じています。

ゼミでは課題読書を行う演習と、各人の関心に基づき探求していく応用演習の2種類を行っています。ゼミ生はみな、活発に意見・批判を交わし合いお互いに刺激を与えあっていけるように感じています。また、各々の多様なバックグラウンドを活かした自由な発想が飛び交うことが当ゼミのまたひとつの特徴です。加えて研究テーマも非常に自由で、日本における外国人労働者を研究する人もいれば、海外の日本人コミュニティに関心を持つ人もいます。また私のように性的マイノリティを扱う人もいれば、e-sportsや相撲に獣師など多様なテーマを時にクラシカルに、時にやわらかく研究しています。

現在ゼミには海外からの留学生もいれば、また逆に海外で留学している日本人学生もいます。それぞれの異文化体験や、フィールドワークに行った時のさまざまなお話を研究室でまたり雑談できるのも当ゼミの魅力のひとつではないでしょうか。

### 地域社会学



### 豊岡 莉奈さん (3年)

地域社会学は、現実の地域の具体的な課題について正面から取り組む学問です。農村環境、地域コミュニティ、高齢者、子育てなど、地域社会にに関する多様なテーマを扱います。机上での学習だけでなく、フィールドにて現場の声を聞き学習することも多いです。

今年の三年生は課題研究にて、高森町の農林業について地域の方に聞き取りを行い、また社会調査実習では、子育て支援をされているNPO法人への聞き取り調査を行いました。その後、皆で協力して調査報告書を完成させています。ゼミでは、統計調査や論文をじっくり読み、そこで浮かび上がる論点に関するディスカッションを行います。発表や議論を通して、社会に関する様々なテーマについての知識を得られるとともに、多角的な視点や論理的に話を組み立てる力が身につきます。地域社会学ゼミは、社会性を磨き、人間としても成長することができる場所です。一回の授業を終える度に、自分が成長できているように感じます。

また、地域社会学のメンバーは非常に仲が良いです。ゼミの前に地域社会学研究室に行くと、3・4年生、院生、時には先生も加わって楽しく談笑する姿が見られます。担当教員である牧野先生と吉武先生は、お二人とも柔らかい雰囲気で常に豊富な知識を交えて指導をして下さいます。恵まれた環境に身を置くことができたこの一年間の経験を、来年度の卒業論文制作や今後の人生に生かしていきたいと思います。

### 民俗学



### 児玉 陽人さん (4年)

民俗学とは現在の人々が伝承あるいは保持している文化を対象とし、それらの変遷や成立の過程を探る学問です。そして民俗学では実際に現地に赴き、人々の暮らしを見て、様々な話を聞くことが基本とされています。

民俗学ゼミの学生たちは実際に講義の中でフィールドに飛び込み、民俗学の基本を体感しながら、民俗学とは何かを学び、実感の伴った知識の蓄積をしています。3年次に実施される社会調査実習では学生が主体となり、調査計画立案から現地での聞き込み、調査報告書作成までを行っています。また、3年次から卒業論文執筆に向けての活動が始まり、各々が自分の関心に合わせてテーマを設定し、実際にフィールドワークを行ながら研究を進めます。ゼミでの発表や4年生の研究テーマごとに分かれたグループ内の3年生の協力によって研究をブランシュアップしていきます。

今期の4年生の研究テーマも例年と同じように幅広く、裏山や壱岐の農村、プロ野球ファン、こどもの本、野錆治、焼酎と様々です。

今期のゼミでは山下先生によるユーモアによってゼミの雰囲気が和やかになり、新任の及川先生による切れ味鋭い助言によって引き締まるメリハリのあるものになりました。また今期から再開された3年生との合同ゼミではコロナ禍で思うように先輩後輩との関わりがなかった3年生と4年生とで悪戦苦闘しながらも意見交換を行い、4年生の研究をより良いものへとブランシュアップしてきました。

### 地理学



### 大山 晴司さん (3年)

地理学とは、「なぜそこでその現象が起きるのか」、「場所や地域による違いがなぜ生じるのか」、「地域の諸問題の原因は何か」などを考える学問です。研究室には、地図を見ることが好きな人や、景色を見るのが好きな人が集まっています。先輩方は、人口移動、アニメの聖地巡礼、地価の変動、高齢者の生活、半導体産業、ファッショントピックなどを取り組んでいます。このように、あらゆる視点から地域を見ることが可能となっています。先輩方は、人口移動、アニメの聖地巡礼、地価

の変動、高齢者の生活、半導体産業、ファッショントピックなどを取り組んでいます。このように、あらゆる視点から地域を見ることが可能となっています。先輩方は、人口移動、アニメの聖地巡礼、地価

## 歴史学科

## ■日本史学

4月、新2年生14名、新入院生2名を迎えて、総勢43名で、研究室の新年度が始まりました。7月、卒業論文構想発表会の後、オンライン打ち上げが開かれ、良く練り上げられたクイズ企画等で、4年生を労い、かつ2年生との懇親を深めました。

9月、3年次に集中講義形式で、5日間にわたって開講される通称「古文書実習」が、前半は学内で、後半は熊本市立博物館で実施されました。実に、3年振りの学外開催で、最終日には、整理対象である馬原家文書の舞台となった川尻地区のフィールドワークも実現しました。4年生は毎日、交替で3時のおやつの時間に、ジュースやアイスを差し入れてくれましたが、特に博物館までの長い坂道を自転車で来てくれた人たちには感謝の言葉しかありません。その恩に報いるべく、3年生は、10月から、実習で調査した古文書のうち、重要なものの解説と解題執筆作業に取り組みました。その成果は、今年度末に『実習報告書』にまとめられる予定です。

11月、卒業論文中間発表会の後の打ち上げは、各専攻別の少人数でしたが、これもまた久しぶりの対面でのコンパとなり、楽しい夜を過ごしました。



▲川尻の船着き場跡で、熊本市文化課・松永さんの説明を受ける

## ■考古学

2022年度の学生は、2年生5名、3年生5名、4年生7名、大学院博士1年生1名(ラオス)、3年生1名(中国)の総勢19名です。といっても、休学2名、転専野予定1名、休みがちの学生若干名となっていて、研究室活動を担う学生数はとても少ない状況です。大学院修士の学生数ゼロも2年連続。今年の発掘調査で主として作業を担ってくれた学生は6名のみで、調査を完遂する上ではかなり厳しい状態でした。また、コロナ禍で様々な研究室行事の中止が3年目となり、先輩から後輩に伝えられてきたノウハウがほぼ完全に途絶えてしまいました。コロナ後の研究室立て直しが急務です。さて、今年の夏の調査も通いで実施せざるを得ませんでした。調査対象は一昨年度と同じ立田山南麓古墳(上)。発掘調査経験がほぼないに等しい学生ばかりでしたが、横穴式石室の再発掘に挑みました。教育効果を考えれば、旧来の割り付け手法を駆使した方がいいのですが、調査期間の関係上、今回は三次元オルソ画像をフル活用して石室図を描きました。ところで、黒髪南キャンパスにある考古学資料室ですが、移転を迫

られています。次年度以降の教育・研究活動に支障が出ないよう、工夫しなければなりません。



▲立田山南麓古墳(上)横穴式石室の調査(2022年8月31日)

## ■アジア史学

2022年度のアジア史研究室は新2年生の加入がなかったため、4年生2人、3年生3人のほか、新たに中国からの研究生1人の6人体制でスタートいたしました。研究室の構成員は少数となっていましたが、これはこれで結束を固めやすいという利点もあります。

今年度の前半は昨年までと同様、新型コロナウィルス感染症の流行の影響を受け、研究室の様々な行事を行うことはできませんでした。見聞を広める機会がなかなか持てないなか、夏に龍谷大学の富谷至先生をお招きし、集中講義を開催できたことは、学生たちにとってまたとない学びの機会となったものと思います。また今年度の後半は新型コロナウィルス感染症の感染者の減少にともない、研究室の利用制限が緩和されることもありました。その際に、4年生が卒業論文の準備に励むかたわら、3年生に史料読解ゼミの漢文史料の読み方・調べものの進め方を指導する風景が散見されたことが印象的でした。先輩たちが日々と築いてきたアジア史研究室の伝統が、こうした厳しい状況のなかでも後輩たちに脈々と受け継がれていっていることを実感でき、心強く感じた次第です。

厳しい状況もまもなく終わるものと信じ、学生たちと新たなアジア史研究室の歩みを進めていく所存です。



▲3年生に史料の読み方を教える4年生

## ■西洋史学

4月に新2年生11名、院生2名を迎えることができました。西洋史研究室は総勢38名の大所帯です。残念ながら、今年度も夏合宿や海外研修をはじめとする研究室恒例の行事を実施することはできませんでした。しかし、学生たちはいろいろ工夫をしながら、研究室の内外で交流を図りました。11月下旬には2年生以上の学生が多数参加し、

卒業論文の中間報告会を行いました。活発な質疑応答により、盛会となりました。また、オンライン開催された九州西洋史学会若手部会において、4年生の永野賢吾さん、竹田華音さんが卒業論文研究の報告を行いました。堂々としたプレゼンテーションと質疑応答は内容とともに高い評価を得ました。他大学の教員や学生のコメントや報告は参加した他の4年生にとっても知的刺激となつことでしょう。院生の藤井太郎さんは熊本大学と日本学術振興会から助成を得て、アメリカのマサチューセッツ州立大学ボストン校に留学し、現地で専門家の指導を受けながら調査・研究を行いました。短期間とはいえ、貴重な経験となつたはずです。西洋史研究室メンバーによるこの1年の学びや活動内容は、『西洋史研究室年報』第24号としてまとめられる予定です。



▲卒業論文中間報告会(11月19日・20日)

## ■文化史学

2022年度は、新たに2名の大学院生と8名の学部生が研究室の仲間に加わりました。入国制限緩和によりイスラエルから留学生1名を迎え入れることができ、学生総勢36名の大所帯になりました。

夏合宿など研究室の恒例行事は相変わらず中止となっていましたが、大学院生たちを中心に、少人数での顔合わせ会の連続開催や読書会の実施などを通して、研究室における人間関係の再構築に努めました。学生たちで定めた課題研究のテーマは「差」。第2次世界大戦を戦ったフランスのド・ゴールとイギリスのチャーチルのあいだの認識のズレ、近代日本の別荘建築群の東西比較、日本の堂本印象やベルギーのルネ・マグリットといった画家たちが考える自由芸術と応用芸術の違いなど、各自が提出したテーマをもとに皆で議論を重ね、各自のレポートを書きあげました。

新井先生の演習テーマは19世紀フランスの女性表象、鈴木先生の演習では『東京日日新聞』の活字版と錦絵版を併読しました。絵画に描かれた服装などの視覚資料を注視しながら「女らしさ」が変遷してゆく過程を探るなかで、女たちを見つめる「男らしさ」の変容にも思いを巡らせ、現代を生きる自分自身の性意識をみつめ直す機会となりました。



▲11月末、卒業論文ゼミ終了後のひとコマ

## 文学科

## ■日本語日本文学 永井 暖花さん（3年）

日本語日本文学研究室では、日本語学・古典文学・近現代文学の3分野を研究しています。普段の会話や本の一節など、日常に溢れる様々なものに目を留め、疑問・興味のアンテナを張り巡らせながら、日々研究の糸口を探しています。

授業で文学作品の考察をする際には、作品内のたった数行、たった一語だけでも一人一人違った解釈をすることがあります。それぞれの意見を共有して自分にない考えを知り、そこから新たな気づきを得る時が何よりも楽しい瞬間です。私たちが日々使う日本語と、日本語によって編まれた日本文学は、日本人にとって最も親しみ深いものだと思います。そんな日本語や日本文学に関する何気ない疑問をとことん深掘りする楽しさを味わえるのが、この研究室の魅力です。



▲学生研究室での授業風景

## ■中国語中国文学 伊東 奈緒さん（3年）

中国語中国文学研究室では三名の先生方のご指導のもと、中国の古典文学、近現代文学、現代政治について日々学習を行なっています。今年度は院生、学部生含め合計九名が卒業論文の執筆を行なっており、十一月下旬には今年最後の卒業論文の中間発表会が行われました。その研究対象や方法は多岐にわたり、学年を問わず非常に良い刺激になったのではないかと思います。

コロナに関する規制も少しずつ緩和され、学生同士の交流も以前よりも行えるようになりました。研究室全体の人数は少ないですが、その分、学年や国籍、立場を問わず全員で親睦を深めることができました。

私は現在3年生ですが、自身の興味関心や知識を深めながら、来年の卒業論文の執筆に向けて頑張っていきたいと思います。



▲ZOOMと対面を併用した卒論発表会

## ■英語英米文学 渡辺 美有さん（3年）

英語英米文学研究室では、英文学や米文学の分野から自分が興味のある作家や作品について深く学ぶことができます。小説だけでなく演劇や詩、映画など様々な媒体の文学を研究対象として、3名の先生方のご指導のもと楽しみながら学んでいます。ここ2年間は感染症拡大防止のためほとんど遠隔で受講して

いたのですが、今年度から対面授業が再開しました。そのためグループディスカッションを円滑に行なうことができるようになります。先生方に質問をしやすくなったりと以前と比べて学びの質も上がったように思います。授業では他学年の方の発表から学ぶことも多く、先生方のアドバイスは私たちをより一層作品理解に導いてくださいます。学校生活では留学生と交流する人や、留学する人もいてたくさんの刺激を受けています。残りの大学生活もこの研究室で有意義に過ごせたらと思います。



▲4年生の集合写真(2022年5月)

## ■独語独文学 古江 玲奈さん（4年）

本年度の独語独文学研究室では、「ドイツのメルヒェンを読む」「現代ドイツ文学にみる安楽死」「ドイツ言語学入門」「ドイツ語グレードアップ」など、ドイツ語圏の言語や文学、文化に関するバラエティ豊かな授業がありました。

新たに独語独文学研究室に迎えた2年生3名の内の1人は、早速1年間のドイツ留学に飛び立っています。また、卒業論文研究に取り組んだ4年生2名は、「広告からみるドイツの香水文化」と「グリム童話における〈美しさ〉」というテーマを扱いました。

残念ながら、本年度もコロナのため通常の合宿はできませんでしたが、独検に向けた模擬試験や、学生が自発的に開催したドイツ語留学準備のための勉強会もありました。卒業まで目いっぱい楽しく学びたいです！



▲卒業論文の中間発表会終了後、五高記念館前にて

## ■仏語仏文学 若狭 光蔵さん（2年）

本研究室では、仏語や仏文学にとどまらず、文化や歴史、思想などについて学びを深めています。またその学びを通じて、多角的な視野やものの考え方、異文化理解など、様々なグローバル能力を養いました。

コロナ禍ではありますが、対面を軸に仏語による文章読解やコミュニケーション、仏語学など、学習の機会が充実しております。また先生方の熱心なご指導や手厚いサポートの下、日々勉学に励んでいます。

現在仏語仏文学モデルには、大学院生を含む計10名が在籍しており、後期から留学をしている先輩もいらっしゃいます。留学生も迎えており、コミュニケーションをとる機会もありました。

互いに切磋琢磨しつつ、仏語仏文学についての理解を深めていければと思っています。



▲第2回卒業論文の中間発表

## ■比較文学 吉元 麻巳風さん（3年）

比較文学研究室の授業では今年度も、国や言語をまたぐ様々なテーマが扱われました。西横偉先生の授業は「翻訳」や「留学」に「俳句」、井上暁子先生の授業では「文学を環境から読む」や「世界文学を読む」、单援朝先生の授業では「中国文学の日本語訳」といったように、多様なテーマが取り上げられています。さらに集中講義では、早稲田大学教授、小野正嗣先生に来ていただき、「文学と歓待」というテーマで授業を受けました。そして今年度は対面授業も多くなり、学生同士や教員との交流も増えています。講義の他にも新人歓迎会や交流会といったイベントが行なわれています。これからも、こういった交流を通じて多様な価値観に触れ、日々学びのある充実した時間を過ごしていきたいです。



▲12月14日(水)屋、比文研で「お弁当の会」、10人で馬肉ハヤシを食べ…

## ■国際文化学 宮本 紫帆さん（2年）

多言語文化学コースでは、文学や文化を多角的・国際的な視点で考察しながら、多様な異文化接触について学んでいます。多くの人が2年次に比較文学と国際文化学の両方を受講し、3年次に自分の興味関心に沿って研究室を決めます。私たちは新設コースの初年度の学年ですが、新しくできた国際文化学の研究室で、一緒にお弁当を食べたり、世界各国の映画を大型モニターで観たりしながら楽しく過ごしています。私自身も授業やコースの仲間から日々刺激を受け、自分の視野をさらに広げたいと思い、来年度から1年間ドイツに留学することを決意しました。ドイツ語はもちろんですが、自分の興味のある移民や難民への教育支援についても学びを深めたいと考えています。



▲国際文化学基礎演習IIの授業風景

## コミュニケーション情報学科

## ■全体総括

コミュニケーション情報学科では、12月1日現在5人の学生がイギリスなどに留学中です。7月にアイルランドから帰国した小田遙香さんは「考え方の幅や視野が広がり得難い経験でした」と振り返っています。今村友紀さんが第1回Kumadai-Hub巡回ポスター展(10月)でポスター発表「大学生の性役割意識の実態」を行いました。「初めての経験でしたが自分の研究のことを聞いてもらえてうれしかったです」と感想を語ってくれました。美坐友里菜さんが第50回九州英語教育学会佐賀研究大会(12月)において研究発表「中学生用教科書で使われている英語の歌と認識される学習効果」を行いました。「発表後に頂いたアドバイスをこれからに生かしたいです」と語っています。多くの学生が多方面に活躍した一年でした。

現代文化資源学コースの教育研究と深く関わる文学部附属国際マンガ学教育研究センターが10月に発足しました。同センターに池川佳宏先生が特定事業研究員として赴任し、アーカイブ構築や現代文化資源学実習の授業支援を担当しています。

## ■就職状況

今年度卒業予定の32名の就職内定率は87.5%、進学を含めた進路決定率は90.6%となっております(2022年11月末現在)。2019、20年度はコロナ禍によって企業の採用活動が落ち込んだものの、21年度以降はコロナ禍以前の状況に戻りつつあると考えてよいでしょう。今年は長引くコロナ禍に加えてロシアによるウクライナ侵攻に伴う世界的なインフレやエネルギー価格の高騰など経済へのマイナス要素が多くありましたが、国内の就職状況が概ね堅調であることは数少ない安心材料です。

本学科の卒業生は從来情報通信系の就職が多かったようですが、今年度は官公庁や国立大学職員など公務員系の就職が10名と一番大きな割合を占めました。これは2コース体制となった現代文化資源学コースの1期生が卒業することに起因する変化というわけではなく、両コースともに共通した傾

向でした。変化の大きな時代だからこそその安定志向を読み取ることは可能なのかも知れませんが、これが今後も続く傾向なのか一時的なものなのか、現時点では何とも云えません。

## ■コミュニケーション情報学コース

コミュニケーション情報学コース(以下『本コース』と略)の学生の活動も徐々にアクティブになってきており、分野横断型の知見で社会課題に取り組むという本コースのミッションを踏まえ、徐々にキャンパスの枠を超えた活動が始まっています。

そのひとつが、中心市街地のエリア・ブランディングの支援。熊本市内の代表的な商店街である上通と並行している「上乃裏通り」は、老朽化した建物が建ち並ぶ狭い路地裏にすぎなかったのですが、レトロな雰囲気と物件の賃料の安さに若手経営者が目をつけ、今では、お洒落な飲食やファッショント、雑貨の店舗が建ち並ぶ、注目のスポットになっています。ただ、自然発生的にできあがってきたエリアであるため、街おこしを主導していく主体が組織化されていませんでした。

そこで、本コースの学生が中心となり(現代資源学コースの学生も参加しています)「上乃裏バージョンアップ・プロジェクト」を開始し、街おこしの主体となる商店会の立ち上げやブランディング活動に参加・協力しています。Webやアプリを使ったタウン紙的なメディア、まちおこしを考える勉強会など色々な活動を、上乃裏の人たちと計画・実施しているところです。

## ■現代文化資源学コース

今年はコース新設から4年目にあたり、1期生12名が卒業の予定です。昨年度からの渡航制限等の緩和に伴い留学する学生が増えたこともあり、3年次進級時点の人数よりもいくらく少なくなっています。各種制約が全くなくなったわけではないものの、当初の希望通りに留学を実現することができる学生が増えていることは喜ばしく思います。

## 現代文化資源学の実践的な学びを体感

水上 愛菜さん(3年)

「現代文化資源学実習」の授業では学生がグループに分かれて「ONE PIECE熊本復興プロジェクト」や「夏目友人帳」の聖地・人吉球磨に関するものなど、さまざまなテーマに対し実践的な学びを深めています。その中で私は『週刊テレビガイド』を扱いながら、男女の結婚観の変化に注目して研究に取り組んでいます。1970年ごろからものが集められており、自分が生まれる前の社会のトレンドが一目で分かるのが新鮮です。見出しや広告ページなど、テレビ番組の内容とは別の角度から分析ができるのは、雑誌媒体ならではの特徴だと思います。

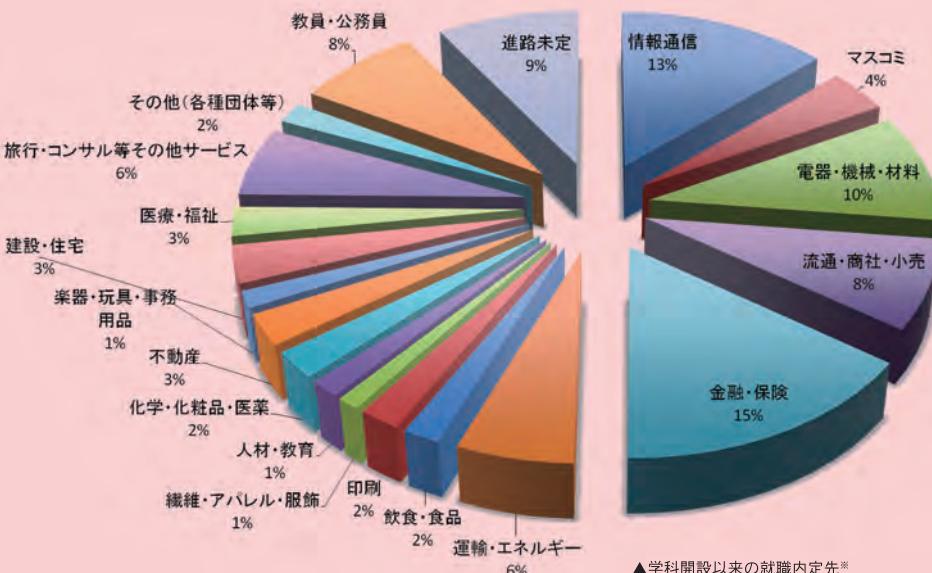
また昨年度に引き続き熊本市文化政策課の方と連携して、Instagramのアカウント「くまもと歴史写真部」で熊本市内の文化資源を発信しています。大学のそばにあるリデル・ライト両女史記念館を訪れたときには、敷地内の石像が日時計だと知り驚きました。普段は気にせず通り過ぎるものに、「あれは何だろう?」と立ち止まってみることは、研究課題を設定するうえでの考え方にも活かされていると感じています。



▲フォローよろしくお願いします

本コースは「新たな文化価値の創造」をキーワードに創設されました。1期生の卒業論文のテーマは落語や流鏑馬といった伝統文化から、戦後のマンガ文化に関するもの、また大学進学行動の地域間格差といった教育社会学的な内容まで多岐にわたります。

「現代文化」というのは良くも悪くも間口が広く、個々の学生の関心に即して自由度の高いテーマ設定が可能です。ただ、本当に自由になんでもやってよいと云われると、逆にどうしたらよいかわからなくなってしまうということしばしば起こります。自分の本当にやりたいことは何だろうとあれこれ悩み回り道する経験は一見すると効率が悪いように思われますが、学問に王道なしと古くから云われるのように、迂遠であっても着実な試行錯誤の積み重ねこそが結果的には一番の近道であろうと思います。



\*: 学科の前身であるコミュニケーション情報学コースの2007年度卒業以降の実績。進路把握の難しい留学生を除いた就職者492名(本学大学院修了3名を含む)が対象。

# 2022年度の教務委員会について



文学部教務委員会は、正副の委員長と、4名の各学科選出委員からなり、教務担当職員と密接に連携しながら、教務全般的な管理運営を行っています。

学生は、大学で学ぶにあたり、履修登録を行い、受講し、試験等による評価を経て単位を修得し進級します。そして、進級に伴い進学コースを選択し、コースや履修モデル内での専門的な教育を受けて卒業論文を執筆し、学士となります。その節目ごとに学生自身が期限内に申請・提出しなければならない教務関係の事案が多くあります。また、諸事情により休学や退学、転学部、転学科等の身分異動の申請も出されます。そうした申請や要件について審議することが教務委員会の業務になります。

# 2022年度の学生支援委員会の活動について



文学部学生支援委員会は、学生生活全般の支援を目的とし、各学科から選出された委員4名と委員長により構成されています。その役割のひとつに、大学のキャリア支援課と連携して学生の皆さんの就職や進路を応援することができます。新型コロナウィルス感染症の影響により一昨年来就職活動は不確定要素の多いものとなっています。また、インターンや説明会、面接等がオンライン化され、就職活動の場が広がると同時に、新しい形態に対する知識と対応力も求められています。文学部の学生はこの変化に比較的うまく対応しており、20年度および21年度卒業生の就職率はこの数年とほぼ変わらないものでした。

文学部では、これから的人生において自分の特性を生かし、充実し

# 2022年度オープンキャンパス報告

コロナ禍でのオープンキャンパスの開催も今年で3年目です。過去2年間はウェブ会議サービス「Zoom」を用いた遠隔での開催となりました。今年度は感染対策を徹底して行い、8月6日(土)に3年ぶりの対面開催を目指していました。参加申し込みも多く、遠くは埼玉県より参加を希望される方もいらっしゃいました。人数制限もありコロナ禍以前の規模での開催は不可能でしたが、それでも模擬授業や学科・コース説明会など充実した内容を準備していました。しかし、残念ながら新型コロナウィルス感染症が熊本県内・九州地域内で急速に拡大

## 留学体験記

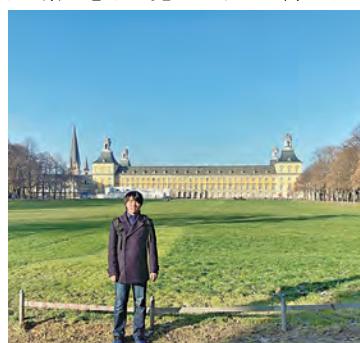
### ■文学科 上村 レオンさん (3年)

私は現在、部局間交換留学生としてドイツのボン大学に通っています。ボンはライン川沿いに位置する都市でベートーベンやシューマンゆかりの地です。

特に最初の頃はドイツ語がとても速く感じ、ほとんど聞き取れないまま授業が進んでいくため、苦労しました。日々の授業への参加と資料を読む予習の繰り返しによってドイツ語に徐々に慣れてきたように感じています。少しづつ講義中の単語を認識できるようになり、内容が理解できたときは嬉しくなります。私は「独文学の入門」や「日本の経済と社会」などの授業を履修しています。独文学の授業では物語や詩などの文学ジャンルについて、それらの構造や分析の仕方などの基本的なことを学びます。日本に関することはすでに知っていることが多いため、比較的取り組みやすく感じます。学生は皆、予習を丁寧にしています。授業中には積極的に手を挙げて自分の意見を主張したり、質問したりする姿が目立ち、私が留学後になってみたいと思う理想像もあります。

するべきことが多い毎日ですが、寮の窓から見えるボンの街並みと美しい空、ライン川沿いのサイクリングなどのちょっとしたことで心が落ちきります。寮の住人は多国籍で優しく、チーズとパンは種類が豊富で飽きることがありません。公共交通機関以外ではほとんどの人がマスクをつけておらず、コロナを感じさせない状況です。

最後に、ボン大学のサポート、私の留学を支えてくださっている家族、先生方、友人にはとても感謝しています。積極的に行動して、残りの留学生活を充実させたいと思います。



▲奥の建物がボン大学講堂

### 文学部教務委員会 委員長 山下 裕作

務になります。

その他にも、大学全体の教務委員会もあり、全学的な事案を検討していくわけですが、正副の委員長は、その全学委員会にも文学部の代表として参画し、議論に加わります。

近年大学には様々な改革が要求され、外部の評価にさらされています。特に教務関連では、グローバルリーダーコース運営のあり方の再検討や、学事暦の柔軟な運用(クオーター制)、履修科目の登録上限(CAP制)等の重要な課題について、数年前より継続的に議論しつづけております。新型コロナウィルス感染症の流行も、当然のことながら大学教育に深刻な影響を及ぼしています。なかなか時局は厳しく、流動的ではありますが、学生の皆さんのが落ち着いて学業に励み、大学教育において実り多き成果が得られるよう、教務委員会一同、今後とも努力する所存です。

### 文学部学生支援委員会 委員長 寺本 渉

た生活をおくるヒントを得てもらうために2年生向けの授業「キャリア支援」を開講しています。本年度も県内外の一般企業やNGO等の様々な職業や立場の講師を招いてキャリアについて考える機会を得ました。また、就職後に必要となる活動を体験してもらうため、特別夏季キャリア支援セミナーとして、民間企業に協力して頂き「IDEATION FACTORY」という課題解決のための発想力養成プログラムを実施しました。参加学生には極めて好評でした。

学生時代は、社会との関わりを意識しながら生活や学習の中で試行錯誤し、様々な知恵を身につけていく時期です。学生の自主性を尊重しながら、充実した人生への助走を応援するのが当委員会の役割だと考えています。

### 広報・情報化推進委員会 委員長 平野 順也

する状況に鑑みて対面は中止することになりました。今年度も遠隔で8月28日(日)に開催となりました。遠隔開催となったオープンキャンパスですが、ライブコンテンツ(学科別相談会)と録画コンテンツ(学科紹介、模擬授業)との充実した内容で開催となりました。オープンキャンパス当日は約380名の高校生に参加していただきました。録画コンテンツは現在も熊本大学文学部HPにて公開していますので是非ご覧ください。文学部の教員による大変興味深い授業や学生が作成した紹介ビデオなど盛りだくさんの内容となっています。

## インターンシップに参加して

### ■総合人間学科 樋口 史門さん (3年)

私は夏季休暇を利用してオンライン・対面問わず複数のインターンに参加しました。今回はその中でも特に印象に残った不動産関連の企業の対面インターンについて書きたいと思います。

インターンの内容としては2段構成であり、1つ目が業界および企業研究、社会人としてのマナーや心構えに関する研修であり、2つ目が1つ目で得た学びを元に行う企画提案と実務体験でした。この2つ目にに関して詳しく説きたいと思います。

企画提案に関してはその企業が販売する実際の物件データを元に、その売り方に関するマーケティングや実際に実行する企画の概要まで決定し、全体発表を行いました。実務体験に関しては班内で、監督役と現場役に分かれて模型を用いながら要望に応じた物件を設計・建築をし、さらにその物件のプレゼンを行う、というところまでを行いました。私は5人組の中でグループリーダーの役割を担い、全体の意見の取りまとめ、方針の決定や実務体験における監督役(図面を見ながら指示を出す)などを行いました。

この体験を通して常に意見調整を行なながらチームで協力して何かを成し遂げる難しさはもちろん、日常の学生生活では決して使わない「頭の筋肉」を使い、実際に社会に出て働くということ、サービスを受け取るのではなく生み出す側のイメージをより鮮明に持つことができ、その後の就職活動、さらにその先にある社会人としての活動の指針とすることことができたと思います。



▲グループワーク中の様子

## 漱石・八雲教育研究センター活動報告

漱石・八雲教育研究センター長 濱田 明

漱石・八雲教育研究センターは、文学部附属センターとして2017年12月に設置されました。第五高等学校ゆかりの夏目漱石と小泉八雲について文学部教員がセンター兼務教員として共同研究を行うとともに、研究成果の定期的な発信を通して地域の文化振興に貢献し、人材育成に寄与することを目的としています。

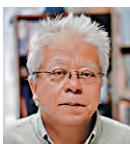
本センターでは2020年から欧文の定期刊行誌 *Soseki and Hearn Studies* を刊行しており、2022年3月発行のVol.3では、夏目漱石や小泉八雲についての英語論文の他、漱石の短編「変な音」のドイツ語訳を掲載しました。

2022年4月には本センター編『アイラヴ漱石先生』(集広舎)を出版しました。漱石とその作品を、知る(漱石作品の概要)、辿る(漱石の生涯)、読む(作品解説)、訳す(各国での漱石受容)、楽しむ(漫画やクイズ)ためのガイドブックです。執筆を本センターに依頼したNPO法人くまもと漱石文化振興会により熊本県内の中学・高校に広く贈呈され、またエフエム・クマモトでは高校生・大学生が作品解説から作品を朗読し、その魅力について語り合う番組「アイラヴ漱石先生」朗読館が毎日曜日全20回放送されました。きれいな本なので書店でぜひ手に取ってご覧ください。

NPO 法人くまもと漱石文化振興会、▶  
熊本大文学部附属漱石八雲教育研究センター編  
『アイラヴ漱石先生  
—漱石探求ガイドブック—』  
(2022年3月 集広舎)



## 2022年度 熊本大学文学会活動報告



### 2022年度 文学会常任理事 慶田 勝彦

文学会は、文学部の教育と研究を様々な形で支える、学生と教員による互助組織です。今年度は主に、以下の事業を計画・実施しました。

#### 1. 文学部の教育・研究環境整備のための支援金

文学部図書室環境整備・学生貸出用機材整備・事務室無線LAN環境整備等に500,000円を支援しています。

#### 2. 講演会・学会等への支援

熊本を主会場とする講演会・学会の開催に対し300,000円の支援を計画し、現時点(2022.12.13)において、「日本民俗学会・第74回年会」(会場:熊本大学黒髪北キャンパス)に100,000円の補助を行いました。

#### 3. 就職活動に対する支援

##### ①就職情報誌提供事業

『公務員試験受験ジャーナル』、『教員養成セミナー』、『就職四季報』をはじめとする就職情報誌を各履修モデルの希望に応じて提供しており、本年度も現時点(2022.12.13)で332,500円を支援しています。

##### ②就活用写真補助

学生会員の就職活動を支援するため、履歴書用写真撮影費の半額補助をしています。現時点(2022.12.13)までの申請はありません。

##### ③就活におけるコロナ対策支援

本年度も新型コロナ・パンデミックの影響を想定し、就活面接等でPCR検査が必要とされた場合、検査費用を補助(2,000円/1回)する事業を継続しています。現時点(2022.12.13)までの申請はありません。

#### 4. 研修旅行補助

授業の一環として行われる調査・実習旅行や、各研究室で課外活動として行われる合宿・研修旅行に対する補助(参加学生会員に1人2,000円)を実施しています。現時点(2022.12.13)で、2件の調査実習等の活動への補助(32,000円)を行いました。

#### 5. 進級記念品

4年に進級した学生会員に対して記念品(1人4,000円の図書券)を贈っており、本年度も111名分(444,000円)を支援しました。

## 永青文庫研究センター活動報告

永青文庫研究センター専任准教授 今村 直樹

3年目のコロナ禍となった2022年度であったが、本センターは以下の活動を精力的に行った。

まず、永青文庫資料に基づく研究活動では、2010年以来刊行を続けてきた永青文庫叢書シリーズの最終巻(10巻目)にあたる、稻葉繼陽センター長・今村直樹専任教員が編集担当した史料集『細川家文書 災害史料編』(2023年2月)が刊行された。研究紀要『永青文庫研究』第6号も2023年3月に刊行予定である。基礎研究では、松井家文書と古閑家文書の総目録作成事業を継続し、着実な進展をみた。今村専任教員を研究代表者とする『『熊本藩関係貴重資料群』の総合的解析による日本近世の意思決定構造の実証的研究』(基盤研究(B))では、2023年3月に共同研究の成果を総括するシンポジウムを実施する。

社会貢献活動では、稻葉センター長と後藤典子研究員が担当した附属図書館貴重資料展「悲劇の藩主 細川光尚」および第16回永青文庫セミナーが、3年ぶりに対面式で開催され、多くの参加者を集めた。また、今村専任教員と三澤純兼任教員が担当した熊本大学×ニューコ・ワン共同企画展「熊本城と細川家の明治維新」(2022年12月14日～同20日、於蔦屋書店熊本三年坂)や、本センターが企画協力した八代市立博物館未来の森ミュージアム特別展「町人と百姓の江戸時代」(2022年10月21日～11月27日)、熊本博物館企画展「熊本城と明治維新」(2023年2月11日～3月19日)も開催された。宮本武蔵・北里柴三郎の新史料発見に基づくプレスリリースも活発に行われた。



▲講演する稻葉センター長(第16回永青文庫セミナー)

#### 6. 新入生歓迎行事・卒業式関連行事に対する支援

学科やコース・研究室で行われる新入生歓迎行事・卒業式行事に対して、総額で239,000円の支援を計画しています。現時点(2022.12.13)で事業はまだ実施されておらず、全新入生への記念品配布および卒業式支援は準備中です。

#### 7. 図書等整備費

学生用図書充実のため、今年度は総合人間学科と歴史学科に対して、それぞれ150,000円の補助を行いました。本年12月中に執行予定です。

#### 8. 留学のための語学試験補助

留学する際に必要な語学試験に対して、(10,000円以上の受験料に対して一律10,000円を、10,000円以下の場合はその額を)補助しています。現時点(2022.12.13)での実績は、20,000円(10,000円以上の受験料2件)です。

#### 9. 学生の学術交流に対する支援

学生が中心となって企画・運営する他大学との学術交流への支援を実施していますが、新型コロナ・パンデミックの影響もあって現時点(2022.12.13)での実績はありません。

#### 10. 学生用コピー機の維持管理

現時点(2022.12.13)での支援は79,765円となっています。

#### 11. 「文学部通信」に対する補助

『文学部通信』の発行費用、ならびに保護者の方々への郵送費を負担しています。

上記の事業は、会員(学生と教員)の会費によってまかなわれ、文学部の教育・研究活動に広く還元されるものです。未加入の学生と教員の方も、文学会の活動の趣旨をご理解いただき、ご加入ならびに各種補助事業の活用をお願いいたします。今後も、みなさまのご理解とご協力をいただけるよう努力して参ります。文学会を宜しくお願いいたします。

## 文学部通信 第22号

2023年3月1日

発 行：熊本大学文学部／熊本大学文学会

編 集：熊本大学文学部 広報・情報化推進委員会

平野順也、及川高、中川順子、松岡浩史、日高利泰

ウェブサイト <https://www.let.kumamoto-u.ac.jp>

